

無政府主義図書館 (Japanese)

続獄中記

大杉栄

大杉栄
続獄中記
1919年

<https://www.ne.jp/asahi/anarchy/anarchy/library.html> (2024年3月14日検索)

ja.theanarchistlibrary.org

1919年

目次

畜生恋	3
女の脛の白きを見て	4
僕の故郷	8
監獄人	10
死刑執行人	12
「俺は捕えられているんだ」	15
手枷足枷	17
幾度懲罰を食っても	19
獄死はいやだ	22
収賄教誨師	24

教誨師は斯う云って、荒畑を教誨堂へ連れて行った。荒畑は此の教誨堂なるものを一度見たかったのだ。そして坊さんにお経でも読まして、其の単調な生活を破る皮肉な興味をむさぼりたかったのだ。

「どうだい、それで坊さん、お経をあげてくれたのかい？」

荒畑がお茶を一杯ぐっと飲み干している間に僕が尋ねた。

「うん、やってくれたともさ。しかも大に殊勝とでも思ったんだろう。随分長いのをやってくれたよ。」

「それや、よかった。」

とみんなは腹をかかえて笑った。

「で、こんな因縁から、お須磨が自殺した時にも直ぐ其の教誨師がやって来て知らせてくれたんだ・・・」

まだ書けばいくらでもあるようだが、此の位でよそう。書く方も飽きた。読む方でももういい加減いやになった頃だろう。

ぶらでは来まいと云う下心があるらしかったそうだ。現に同志の一人の細君は、面会へ行く度に御土産物を持って彼れを訪うて、随分歓待されたと云う話した。が、僕の女房は、早く出獄した他の同志から僕と彼れとの間柄をよく聞き知っていたので、とうとう訪ねても見なかったそうだ。

それから二年ばかりして、或日の新聞に、此の教務所長が収賄をして千葉監獄に収監されたと云う記事を発見した。尤も其後証拠不十分で放免になったと聞いたが。

教諭師に就いては先日面白い話を聞いた。荒畑と山川とが東京監獄から放免になるのを、門前の或る差入屋まで迎えに行った。二人とも少し痩せて顔の色も大ぶ蒼白くはなっていたが、それでも元気で出て来た。

差入屋の一室で暫く皆んなで快談した。迎えられるものも迎えるものも大がい皆獄通だ。迎えられるものは盛んに其の新知識をふりまく。迎えるものは急転直下した世間の出来事を語る。

「おい、抱月が死んで、須磨子が其のあとを追って自殺したのを知っているかい？」

とたしか塚が二人に尋ねた。

「ああ知っているよ。実はそれに就いて面白い事があるんだ。」

荒畑が塚の言葉のまだ終らぬうちに、キャッキヤと笑いながら云った。

荒畑の細君が、何んとかして少しでも世間の事情を知らせようと思つて、さも親しい間柄のように書いて抱月の死を知らせたのだそうだ。

「ええ、先生には随分長い間学校でお世話になったもんですから。」

荒畑は其の手紙を見てやって来た教諭師にでたらめを云った。荒畑は抱月とはたった一度何にかの会で会ったきりだった。勿論師弟関係もなんにもない。

「就いちゃ、御願いがあありますが。」

と荒畑はちょっと考えてから云った。

「そんな風ですから、別に近親と云うわけでもないんですが、一つ是非回向をして下さる事は出来ないものでしょうか。」

教諭師は又何か厄介な「御願い」かと思つてちょっと顔を顰めていたが、其の「御願い」の筋を聞いて、額の皺を延ばした。そして今までは死んだ人の話しをするのもであり、殊更に沈鬱らしくしていた顔色が急ににこにここと光り出した。

「え、ようござんすとも、お安い御用です。」

畜生恋

僕はいつも独房にばかりいて、雑房の方の事はよく知らない。雑房と云うのは、詳しく云えば雑居房だ。六人も八人も十人も、或はもっと多くの囚人が六畳敷か八畳敷きかの一室にとど籠められている。定員四名、現在十二名、と云うような札が、監房の入口にかけられてあるのも珍らしくはない。

多くは同じ性質の犯罪、たとえば泥棒は泥棒と、詐欺は詐欺と一緒に置かれて、数ヶ月乃至数ヶ年の間、仲よく泥棒や詐欺の研究をしている。実際皆な随分仲がいい。しかし其の間にも、他の何処でもあるように、よく喧嘩がある。時としては殺傷沙汰にまでも及ぶ。が、其の喧嘩のほとは、他の正直な人々の間のように、慾得ではない。其の殆んど総てが恋のいきさつだ。

ちょっと色の生っ白い男でもはいつて来れば、皆んなして盛んにちやほやする。全くの新入りでも、監房や工場のいろんな細かい規則に、少しもまごつく事はない。なにかにつけて、うるさい程丁寧に、よく教えてくれる。庇ってもらえる。皆んなは、ただそれだけの事でも、どれ程嬉しいのか知れない。

斯うして皆んなが、若い男のやさしい眼つきの返礼に、何物にも換え難い程の喜びを分ち合っている間は無事だ。が、それだけでは満足の出来ない男が出て来る。其の眼の返礼を独占しようとする男が出て来る。平和が破れる。囚人の間の喧嘩と云うのは、殆んど皆な、直接間接に此の独占慾の争いに基づく。之れは世間の正直な人々の色恋の争いと何んの変わりもない。

何処の監獄の囚人の間にも、此種の色情は随分猛烈なものらしい。

尤も、これだとして、決して囚人特有の変態性慾ではない。女っ気のない若い男の寄宿舎なぞには何処にでもある事だ。現に僕は陸軍の幼年学校で、それが知れば直ぐに退校されると云う危険をすら冒して、忠勇なる軍人の卵共が、随分猛烈に此の変態性慾に耽っているのを見た。甚だお恥かしい次第ではあるが、僕もやはり其の仲間の一人だった。

其の僕が、しかも同志の間では丁度ピストル強盗と云ったような形で赤い着物がよく似合うとからかわれていた程の物騒な面構えなのにも拘わらず、危く監獄で此の犠牲になろうとした事があつた。

千葉での或日、湯にはいつていると、其処へ見知らぬ男が一人不意に飛込んで来た。監獄の湯は、どこでもそうらしいが、大勢一緒にはいる大きいのと一人づつ入れる小さいのとがある。僕等は、いつもは其

の大きいのに仲間だけが一緒にはいるか、或は何にかの都合で小さいのに一人づつ入れられた。其の日は一つ一つ板で隔てて一列に並んでいる小さい方へ、みんなが別々に入れられた。ほかの囚人を一緒に入れる筈はないのに、とは思ったが、看守の間違にしる何んにしる、とにかくほかの囚人と接触するのは面白いと思って黙っていた。

其の男は僕がわざわざ隅に寄って前の方をあけてあるのに、「失敬」と云いながら僕の肩を叩いて、後ろへはいろうとした。妙な奴だとは思いつつ僕は少し前へ出た。すると、いきなり其の男は飛びこんで来て、後ろから僕を抱きかかえた。

僕は飛びあがって、そいつの横面を一つうんと殴りとばして、そへ出た。もう「出浴」の号令のかかる間近でもあったのだ。

脱衣場では、同志の村木と云うまだ未丁年の男が一人、蒼い顔をして着物を着かけていた。

「どうした？」

僕は又例の脳貧血かと思って、そばへ寄って尋ねた。少し長く湯にはいっていると、僕等の仲間はよく、此の脳貧血を起した。

「今、変な奴がはいって来てね、いきなり後ろから抱きかかえやがったもんだから、急いで逃げ出して来たんだ。」

と村木がまだ驚いた顔つきのまま話していたところへ、他の仲間も皆な出て来た。そして村木だけならまだしも、ピストル強盗までもやられたと云うんで、皆んなで大笑いした。

が、実際笑い事じゃないんだ。

女の脛の白きを見て

此の畜生同様の囚人の間にあつて、僕自身は聖人か仙人かのようにあつた事は、前にちょっと云った。しかしそれも、僕が特別にえらい非常な修行を積んだ人間だからと云う、何んの証拠にもならない。

人はよく、牢にはいったら煙草が吸えないで困るだろうな、と云う。僕は随分の煙草飲みだ。が、今だ嘗つて、其のために牢で困つた事はない。はいると直ぐ、殆んど其の瞬間から、煙草の事などはまるで忘れて了う。始（はじめ）てはいった東京監獄では、看守等が休憩所でやっているのをよく窓から見たが、まるい棒片のようなものを喫えてパッパと煙をはき出しているのが、羨ましいどころではなく本当に馬鹿馬鹿しく思われて仕方がなかった。其頃は、まだ一人身で堺の家に同居していた、僕の女房の保子が、からかい半分に猫が煙草を吸っている絵

説法はしない。ただ時候の挨拶や、ちよいとした世間話をして、監獄の待遇に就いてのこちらの不平を聞いて行く。

千葉の此の教務所長と云うのは、其頃もう六十余りの老人で、十幾年とか二十幾年とか監獄に勤めて地方での徳望家だと云ううわさだった。僕にはどうしても其のうわさが正当には受けとれなかった。何によりも先づ、其の小さいくるくるした眼に、狐のそれを思わせる或る狡猾さが光っていた。何にか話をするのでなく御説法めく。本当に人間と人間とが相對しているのだと云うような暖かみや深切は見えない。そしていつも、俺は役人だぞ、教務所長だぞ、と云う心の奥底を裏切る何者かが見える。僕は此の男が見舞に来るのを千葉での不愉快な事の一つに数えていた。

「如何です。今日は大ぶ暖かいようすな。」

わざとらしい、何処かにこちらを見下げているような嘲笑の風に見える微笑を洩らしながら、はいって来ると直ぐいつもの天気の良い挨拶をした。僕は此の男のいやな中にも、此の微笑が一番いやだった。それに今、折角読みかけていたトルストイの『復活』の邪魔をされたのが、其の足音を聞いて急に本をかくして仕事をしているような真似をさせられたのが、猶更に其の微笑に悪感を抱かせた。

「何にが暖かいんだ。俺れが今斯うしてブルブル震えているのが見えないのか。」

僕は腹の中で斯う叫びながら、再び其の顔を見あげた。そしていきなり、

「ふん！綿入の五六枚も着てりゃ、いい加減暖かいだろうよ。」

と毒づいてやった。実際彼れは、枯木のような痩せたからだを、ぶくぶくと着太っていた。そして其の癖、両手を両脇のところでまげて、まだ寒そうに其の両手でしっかりとからだを押えていた。

教務所長の痩せ細った蒼白い顔色が、急に一層の蒼味を帯びて、其の狐の眼が更に一層意地わるく光った。僕は仕事の麻縄をなう振りをしながら黙って下を向いていた。

教務所長のからだがいと向きを変えたと思うと、彼れは廊下に出て、恐ろしい音をさせて戸を開けて行った。僕は直ぐ麻縄をそばへ投げて、布団の下にかくしてある『復活』をとり出した。そしていい気持になって、さっきの続きを読み始めた。

其後数ヶ月の間、或はとうとう出る最後の時までであつたかもしれない、僕は其の不愉快な老教諭師の顔を見ないで済んだ。

出獄後聞くと、此の教務所長は面会に来る女房に切りに自宅へ来るようにと云っていたそうだ。そしてそれは、本人の行状に就いて詳しく話しも聞きもしたいと云う事であつたそうだが、来るにはどうせ手

収賄教誨師

獄中で一番いやなのは冬だ。

綿入一枚と襦袢一枚。シャツもなければ足袋もない。火の気は更がない。日さえ碌には当らない。これで油っ気なしの食物でいるのだから、とても堪るものではない。

体操をやる、壁を蹴る。壁にからだを打つける。運動に出れば、毎日三十分づつ二回の運動時間を殆んど駈足で暮らす。しかしそんな事ではどうしても暖くならない。冷水摩擦をやる。しかもゆうべからの汲み置きを殆んどいつも氷っている水だ。此の冷水のほかには殆んど全く暖をとる方法がない。それで朝起きると先づ摩擦をやる。夜寝る前にも、からだぢゅうが真赤になるまで摩って、一枚こっきりの布団に海苔巻きになって寝る。かしわ餅になって、と人はよく云うが、そんな事で眠れるものではない。昼も、膝っこぶのあたりから絶えずぞくぞくして来て、時とすると膝が踊り出したように慄える。そして上下の歯ががちがちと打ち合う。そんなふうになると、日に二度でも三度でも素裸になってからだをふく。これで少なくとも一時間は慄えを止める事が出来る。

冬の間の一番のたのしみは湯だ。「脱衣！」の号令で急いで着物を脱いで、「入浴！」で湯にとびこむ。

「洗体！」の号令すらもある。多くは熱くてはいれない程の湯に、真赤になって辛棒している。それ程でない、夕飯前の湯が夜寝る時までの暖を保ってくれない。

稀に、夕飯の御馳走が、鮭か鱒かの頭を細かく切ったのを実にしたおつけの時がある。其の晩は、さすがに、少し暖かく眠れる。

それでも不思議な事には滅多に風もひかない。この二月の初めに、四ヶ月の新聞紙法違犯を勤めて来た山川の如きは、やはり肺が悪くて殆んど年中風を引き通している男だが、向うではとうとう風一つ引かずに出て来た。そして出ると直ぐ例の流行性感冒にやられて一月近く寝た。

斯ういった冬の、又千葉での或日の事。教務所長と云う役目の、年老った教誨師の坊さんが見舞に来た。

監獄には此の教誨師と云う幾人かの坊さんがいる。ところによってはヤソの坊さんもいるそうだが、大がいは真宗の坊さんだ。

普通の囚人には、毎週一回、教誨堂とか云う阿弥陀様を飾った広間に集めて、此の坊さんが御説教を聴かせるのだそうだが、僕等には坊さんの方から時折り僕等の室へ訪ねて来る。大がいの坊さんは別に御

はがきを送って来た。僕は直ぐに「あれは物の本で見る煙草と云うものらしいが、さては人間の食物ではなくして猫の食物か」と云うような返事を出して、本当に強情な人だと云って笑われた。しかしそれは、僕の痩せ我まんでも強情でも、何んでもない。実際そう云う風に感じたのだ。僕は何にも牢にはいったら煙草は吸えぬものと覚悟をきめていた訳ではない。反対に、煙草位は吸えるだろうと云う極く呑気なつもりで、迎いに来られた時には、わざわざ其の用意までして出掛けたのだ。僕は又、克己とか節制とか云う事の、殊更の何んの修養をも積んでいた訳ではない。反対に、そう云う謂わゆる道徳にはわざと反抗して、つまらぬ放縦を尊んでいた位だ。

それなのに、警察で煙草を取り上げられた時には少なからず口惜しかったが、其後はびったりと煙草と云うものを忘れて了った。そして今云ったように却って反感に似たものを持つようにならなかつた。

僕がえらいんでも何んでもない。誰れでもが経験する通り、電車に乗っていて、そとを通る人間が巻煙草を吸っているのを見ても、別に羨ましがりもせず、時としては却ってそれを馬鹿馬鹿しく思う事があると同じだ。

性慾に就いてでもやはりそうだ。尤もこれは、煙草の場合のように、無意識のあきらめと其の結果の客観的批評のせいだとは思えない。もう少しこみ入った事情があるように思う。

其の一つは、たかだか大根か芋を最上の御馳走とする、殆んど油っ気なしの食物だ。次ぎには、殊に独房では、性慾に就いて殆んど何んの刺激もない事だ。そして最後には、終日、読書と思索とで根を疲らし切つて了う事だ。

此の三つの条件さえ具えていれば、誰れでも、何んの修養も何んの苦悶も何んの努力もなしに、直ちに五慾無漏の名僧知識になれる。山にはいるか牢にはいるかだ。

しかし久米の仙人も雲から足を踏みはづしたように、此の牢屋の仙人も時々凡夫に帰る。

ほかでそんな機会はなかったが、東京監獄での第一の楽しみは、女の被告人か囚人かを見る事であった。此の事も前にちよつと云った。

僕等はいつも独房の四監か八監かに置かれた。此の何監と云うのは其の建物の番号で中央から半星形に射出した四つの建物に、二階は一監から四監、下は五監から八監の名がついていた。四監は二階で八監は其の下だ。そして僕はいつも運よく日当りのいい南側の室に置かれた。

此の建物の南側に沿うて、其処から五間ばかり隔てて、女監へ行くタキの廊下がある。毎日一度か二度か三度か、必ず十数名づつの新入りが此処を通つて行く。なかなか意気な、きちんとした風のおかみ

さんらしいものもある。伊達巻姿や、時とすると縄帯姿の、頗るだらしないものもある。其の大部分は謂わゆる道路妨の拘留囚だそうだ。此の道路妨と云うものに就いては又あとで話しする。

此の連中が廊下の向うからカランコロン、カランコロンと喧ましく足音を立ててやって来る。それが聞え出すと、八監や八監の南側の先生等は、そら来た！とばかり、何事をさし置いても窓ぎわへ走って行く。

僕はいつも走って行って、漸く眼のところが窓わくにとどく位なのを、雑巾桶を踏台にして首さしのぼして、額を鉄の冷たい格子に押しつけて、見た。そして、あの二番目のはよさそうだなとか、五番目のは何んて風だとか云うような事を、隣り近所の窓と批評し合った。時とすると、

「おい、三番目の姉さん、ちょっと顔をお見せよ。」

などと呼ぶ奴もある。

女共の方でも、自分からちょっと編笠を持ちあげて、こっちを見るのか自分の顔を見せるのか、する奴もある。時とすると、舌を出したり、赤んべをして見せたりする奴すらある。

僕はぼんやりそれを見ていて、よく看守に怒鳴りつけられた。

たしか屋上演説事件の治安警察法違犯の時と思う。例の通り警察から警視庁、警視庁から東京監獄へと連れて行かれて、先づ例のシャモ箱の中へ入れられた。尤もこれは男三郎君の時に話したような面会所のそばのではない。そんなのがあちこちにあるんだ。こんどのは、連れて来られると直ぐ、所持品を調べられたり、着物を着換えさせられたり、身分罪名人相などの例のカアドを作られたりする、其の間自分の番の来るのを待っている、シャモ箱だ。

暫くすると、背中合せのシャモ箱の方へも人がはいったような気がする。ぺちゃくちゃと女のらしい声がする。

「おい、うしろへ女が来たようだぜ。一つ話しをして見ようじゃないか。」

と両隣りの堺と山川とに相談して、コツコツとうしろの板を叩いた。向うでも直ぐにやはりコツコツとそれに応じた。

「おい、何んで来たんだい？」

「お前さんは？」

「泥棒さ。」

「じゃ頼もしいわね。わたしはどうろぼうよ。いくら食ったの？」

「たった半年だ。君は？」

「わたしの方は二週間よ、直ぐだわ。こんど出たら本当に堅気になると思っているの。お前さん出たらやって来ない？うちは何処？」

のほかには僕の生きかたがあるまいとすら考えた。肺病でもいい。何んでもいい。とにかく長くかかる病気で、あすこにはいらなくちゃならんと思った。

が、一度、巢鴨で此の病監にはいることが出来た。前に話した徒歩で裁判所へ行く道で、つまづいて足の拇指の爪をはいだ。其処にうみを持ったのだった。

巢鴨の病監は、精神病患者のと、肺病患者のと、普通の患者のと、三つの建物に分れている。僕は其の最後のはにいった。いい加減な病院の三等や二等よりも余程いい。僕のは三畳の室で、さすがに畳も敷いてある。其処へ藁布団を敷いて、室いっぱい窓から一日日光を浴びて、そとのいろんな草花を眺めながら寝て暮らせばいいんだ。看護人には、囚人の中から選り抜きの、殊に相当の社会的地位のあったものを採用する。僕には早稲田大学生の某芸者殺し君が専任してくれた。

嘗て幸徳は、此の病監にはいて、或る看守を買収して、毎朝万朝報を読んで、毎晩一合か二合かの晩酌をやっていたそうだ。

僕も若し酒が飲めれば、葡萄酒かブランデーなら何時でも飲めた。それは看護人が薬室から泥棒して来るのだった。

医者も役人ぶらずによく待遇してくれた。看守も皆仏様で、僕は殆んど自分が看守されているのだと云う気持ちも起らなかった、位によく謹んでいられた。

御馳走も普通の囚人よりは余程よかった。豚汁が普通には一週間に一回だったのが二回あった。それに豚の実も普通よりは数倍も多かった。

僕は此の病監で、自分が囚人だと云う事も殆んど忘れて一ヶ月余り送った後に、足の繃帯の中に看護人等の数本の手紙を巻きこんで出獄した。

しかしこれがほんのちょっと足の指を傷つけた位の事だから、こんな呑気な事も云って居られるものの、若しもっと重い病気だったらどんなものだろう。僕は先に肺病でもいいから病監にはいたいと云った。今僕は、現に、千葉の御土産として其の病気を持って来ている。もう殆んど治ってはいるようなものの、今後又幾年かはいるような事があって、再び病気が重くなって、病監にはいられなければならぬようになったらどうだろう。

千葉では、僕等が出たあとで直ぐ、同志の赤羽巖穴が何んでもない病気で獄死した。其後大逆事件の仲間の中にも二三獄死した。今後もまだ続々として死んで行くだろう。

僕はどんな死にかたをしてもいいが、獄死だけはいやだ。少なくとも、有らゆる死にかたの中で、獄死だけはどうかして免れたい。

僕がもう半年ばかりで出ようと云う時に、渡辺が来て、こんな事を云った、僕は少々困ったが「ああ来たまえ」とだけは云って置いた。

が、いまだにまだ、此の男は其の謂わゆる「弟子入り」に出来ない。何処に、どうしているんだか。多分又、何処かの監獄にはいつているんだろうと思うが。泥棒には丁度いい、小柄の、はしこそうな、まだ若い男だったが。

しかし此の「弟子入り」は、向うで来なくとも、既に僕の方で向うに「弟子入り」していたのだった。其後僕は、「野獣」と題して、僕の雑誌（「近代思想」）に彼を歌った事があった。

また向う側の監房で荒れ狂う音がする、
怒鳴り声をする、
歌を歌う、
壁板を叩いて騒ぎ立てる。
それでも役人は知らん顔をしてほうって置く。
いくど減食を食っても、
暗室に閉じこめられても、
鎖づけにされても、
依然として騒ぎ出すので、
役人ももう手のつけようがなくなったのだ。
まるで気ちがいだ、野獣だ。
だが僕は、この気ちがい、この野獣が、
羨ましくて仕方がない。
そうだ！僕はもっと馬鹿になる修業を積まなければならない。

獄死はいやだ

囚人で羨ましかったのは、此の野獣と、もう一つは小羊のような病人だった。

巢鴨の病監は僕等のいたところからは見えなかったが、東京監獄でも千葉でも、運動場へ行く道には必ず病監の前を通った。普通の家のような大きな窓のついた、或は一面にガラス戸のはまった、風通しのよさそうな、暖かそうな、小綺麗な建物が、殆んど四季を通じて草花や何にかの花に囲まれて立っている。そして其の花の間を、呑気そうに、白い着物を着た病人がうろついている。

僕は本当にどうかして病人になりたいと思った。若し五年とか、十年とか、或は終身とか云うような刑ではいった時には、僕は此の病人

と云うような話して、でたらめの処や名を云い合って、とうとう出たら一緒になろうと云う夫婦約束までもして了った。

「大ぶお安くないな。だが、あのどうろぼうと云うのは何んだい？」

「さあ、僕にもよく分らないがね。」

と塚と話している中へ、山川もその詮議に加わって、漸くそれが道路妨害の道路妨だと云う事が分った。そして、

「泥棒に道路妨はいいな。」

と三人で大笑いした。さすがの彼女もあからさまに其の本職を云いかねたのか、それともほんの語呂合せのいたづらをやったのか。

又、未決監から裁判所へ喚び出される。他にも僕はよく、余罪があって、既決監からも裁判所へ喚び出された。大がいは馬車でだが、巢鴨からは歩いたり車に乗せられたりした。

あの赤い着物を着て、編笠を被って、素足に草蛙をはいて、腰縄をつけられて引っぱられて行くさまは、たしかに道行く婦女子等をして顔そむけしめ唾はかしむるに足るものである。しかし向うの思わくなぞはどうでもいい。こっちはただ、こっちの顔の見えないのを幸いに、向うの眼のさめるような着物の赤い色と、白い生々とした柔しい顔の色とに黙って眼じりを下げていればいいんだ。

西洋の野蛮国たるロシアでは、「乞食と囚人とは馬鹿にするな、いつそれが誰れの運命になろうものでもない」と云うような意味の諺があって、囚人が送られる時なぞには、百姓の婆さんや娘さん達が争って出て来て、牛乳やパンや時とすると銅貨までも施してくれる。そして頬にキッスして「天にまします吾等の神よ、此のいと憐れなる汝の子に殊更のお恵みと仕合とを与えたまえ」とお祈りをしてくれる。と云うような醜態は、東洋の君子国たる日本では、とても望まれない。ましてや道路妨君のように、「頼もしい人だ」なぞとは誰れ一人思っちゃくれない。

それでいいんだ。こっちはただ諸君の姿さえ拝まして貰えればいいんだ。久しぶりでそとへ出て、見るものが総て美しい。と云うよりは珍しい。総てがけばけばしく生々として見える。殊に女は、女でさえあれば、どれもこれも、皆弁天様のように美しく見える。

馬車では、僕はいつも、前か後ろかの一番はじに置かれた。此のはじにいなければそとはよく見えない。横はよろい戸になっていて、前後にだけ小さな窓の金あみが張ってある。僕は馬車に乗っている間、始めから終りまで、此の金あみに顔を押しつけて、額に赤く金あみのあとがつく程に、貪るようにしてそとを眺めた。

面会に来る女の顔も美しい。もう幾年も連れ添って見あきる程見た顔なのに、黙って其の顔を眺めているだけでもいい気持だ。眼のふちの小皺や、まだらになった白粉のあとまでが艶めかしい趣きを添える。

僕の故郷

こんなちよいちよいたエピソードのほかには、うちにいる間は、読書か思索か妄想かのほかに時間の消しかたがない。

読書にも飽き、思索にも飽きて来ると、ひとり手に頭が妄想に向う。それも、その現在の事は一切例の無意識的にあきらめて、考えても仕方のない遠い過去の事か、出獄間近になれば出てからの将来の事などが思い浮べられる。

現在の女房の事でも、面会に来るか手紙が来るかの時でもなければ、それも二ヶ月に一度づつしかないのだが、滅多には思い出さない。そして古い女の事や、子供の頃の女友達の事なぞが切（しき）りに思い出される。

元来僕には故郷と云うものがない。

生れたのは讃岐の丸亀だそうだが、生れて半年経つか経たぬうちに東京へ来た。そして五つの時に父や母と一緒に越後の新発田へ逐いやられた。東京では父は近衛にいた。うちは麴町の何番町かにあった。僕は其の近衛連隊の門の様子と、うちの大体の様子と、富士見小学校附属の幼稚園の大体の輪郭とのほかには、殆んど何んの記憶もない。

僕の元来の国、則ち父祖の国は、名古屋を西にさる四五里ばかりの津島に近い或る村だが、其処には自分が覚えてからは十四の時に始めてちょっと伯父の家を訪うて、其の翌年名古屋の幼年学校にはいつてから時々ちよいちよい遊びに行ったに過ぎない。少しも自分の国と云うような気はしない。本籍は其処にあったのだが、其後東京の自分の住んでいた家に移した。

ただ越後の新発田にだけは、五つから十五までのまる十年間いた。其後も十八の時までは毎年暑中休暇に帰省した。従って若し故郷と云えば其処を指すのが一番適切らしい。

名古屋から始めて暑中休暇に新発田へ帰る途で、直江津から北越鉄道に乗換えて長岡を超えて三条あたりまで行った頃かと思う。ふと僕は、窓の向うに東北の方に長く連なっている岩越境の山脈を眼の前に見て、思わず快哉を叫びたい程の或るインスピレーションに打たれた。其

と或時其の男は錠前を磨きながら、元気のいいしかし低い声で話し出した。

「すると、一緒にいた何十人のものが、やはり一緒にワアアと凱の声をあげたんです。看守の奴等びっくりしやがってね。其の間に私等十何人のものは、運動場の向の炊事場へ走って行って、其処に積んであった薪ざっぽを一本づつ持って、新しく凱の声をあげて看守に向って行ったんです。すると看守の奴等青くなって、慄えあがって、手を合わせて、どうか助けてくれて、あやまるんです。」

渡辺はちよいちよ看守の方を窺み見ながら、少し開けた戸の蔭に顔をかくして、うれしそうに話し続けた。

それからみんなはどやどや門の方に走って行ってとうとう門番を嚇しつけて、先頭の十幾人だけが一旦門外に出たのだそうだが、やがて又こんな風で逃げ出しても直ぐに捕るだろうと云うので引帰して来た。そして皆んな監房へ入れられた。

其後二三日の間は、監房の内と外とで囚人と看守との間の戦争が続いた。囚人が歌を歌う。看守がそれを叱る。と云うような事がもとで唾の引っかけ合い、罵詈雑言のあびせ合いから、遂に看守が抜刀する。竹竿を持って来て、其のさきにサアベルを結びつけて、それを監房の中へ突きやる。囚人は便器の蓋や、はめ板をはづして、それを防ぐ、やがて看守はポンプを持って来て煮湯を監房の中に注ぎこむ、囚人等は布団をかぶってそれを防ぐ。と云うような紛擾の後に、とうとう渡辺は典獄か看守長かの室に談判に行く事になった。其処で数名の看守に斬りつけられたのだと云う。

「ね、旦那、其の斬った奴が皆んな前に運動場で手を合わせてあやまった奴等でしょう。実に卑怯なんですよ。」

渡辺は斯う話し終って、もうとうに磨いて了った錠前の戸を閉めて、又隣りの室の錠前磨きに移って行った。

此の男は、東京監獄では、まだ裁判中であつたせいか、極くおとなしくしていた。そしていよいよ官吏抗拒の刑がきまって千葉へ移された時にも、其の当座は至極神妙にしていたが、やがて何んに怒ったのか、又手のつれられない暴れものになって了った。

「ね、旦那、こんどはもう私は出たら泥棒はやめです。馬鹿々々しいですからね。いくら暴れたって、泥棒ちゃ誰しも相手にしちゃくれなんでしょう。だから、こんどは私、旦那のところへ弟子入りするんです。ね、いいでしょう、旦那、出たらきつと行きますよ。旦那の方ちゃ、暴れば暴れる程、名誉になるんでしょう。そして監獄に来て、まるで御大名で居れるんですからな。」

始めた。遂には其の看守が余り訳の分からぬ馬鹿ばかり云うので、ほかの看守等は皆な走って飛んで来た程の大きな声で、其の看守を罵り出した。それが其時一緒にいたもう一人の囚人に、余程気に入ったらしい。

「君なんかはまだ若くて元気がいいからいい、うんと確りやりたまえ。何でも中ぶらりんでは駄目だ。うんと音なくしてすっきり役人共の信用を得て了うか。そうなれば多少の犯則も大目に見て貰える。それでなきゃ、うんとあばれるんだ。あばれてあばれ抜くんだ。減食の二度や三度や、暗室の二度や三度は、覚悟の上で、うんとあばれるんだ。そうすれば、終いにはやはり、大がいの事は大目に見て貰える。だが中ぶらりんぢゃ駄目だ。いつまで経っても叱られてばかりいる。屁を放ったと云っては減食を食う。それぢゃつまらない。僕なんぞも前には随分あばれたもんだ。それでも減食を五度暗室を三度食ってからは、もう大がいの事は叱られない。歌を歌おうと、寝ころんでいようと、何んでも勝手気儘な振舞が出来ようになった。」

四十余りになる其の男は、僕を何んと思ったのか、切りに説いて聞かせた。実際其の男は減食の五度や六度や、暗室の三度や四度や、又五人十人の看守の寄ってたかっつての蹴ったり打ったりには、平気で堪えて来れそうな男だった。からだもいいし、話っぷりもしっかりしているし、如何にもきかぬ気らしいところも見えた。

僕は例の強盗殺人君で随分其の我儘を通して囚人のある事は知っていた。しかしそれは死刑囚だからとばかり思っていた。死刑囚では、猶其のほかにも、其後そんなのを二三人見た。が死刑囚でない囚人が、それだけの犠牲を払って自由を勝ち得ていると云う事は、此の話で始めて知った。

そして其後千葉で、始めて、そう云う男に実際にぶつかった。今でも其の名を覚えていて、渡辺何んとか云う、僕と同じ罪名の官吏抗拒で最高限の四年喰っている男だった。

此の男とは、東京監獄でも同じ建物にいて、よく僕の室の錠前の掃除をしに来たので、其の当時から知っていた。初め窃盗か何にかで甲府監獄にはいついたのを、看守等と大喧嘩して、其のために官吏抗拒に問われて東京監獄へ送られて来ていたのであった。額から鼻を越えて眼の下まで延びた三寸ばかりの大きさの傷があった。又、同じ大きさの傷が両方の頬にもあった。其他頭にも数ヶ所の大きな禿になった傷あとがあった。それは皆な甲府で看守に刀で斬られたのだそうだ。

「初めは私等の室の十二三人のものが逃走しようとする相談をきめて、運動に出た時に、ワアアと凱（とき）の声をあげたんです。」

の山脈は僕が嘗て十年間見た其儘の姿なのだ。そして其のあちこちには、僕が嘗て遊んだ、幾つかの山々が手にとるように見えるのだ。

始めて僕は故郷と云うものの感じを味わった。

「故郷はインスピレーションなり」と云った蘇峰が誰れかの言葉が、始めて身にしみて感じられた。が、嬉しさの余り、其時にはまだ、これが故郷の感じだと云う理智は、其の感じの解剖は、本当には出来ていなかった。蘇峰が誰れかの言葉と云うのも、どうやら、其後の或時に思い出したもののようだ。

此の故郷の感じは、其の「或時」になって、再び十分に味わった。そしてこれが謂わゆる故郷の感じだと云う事は、其の「或時」になって始めて十分に知った。

始め半年ばかりいて、出てからまだ二月とは経たぬうちに、再び巢鴨へやられた時の事だ。巢鴨のあの鬼ヶ島の城門を、護送の看守が「開門！」と呼ばわって厚い鉄板ばりの戸を開かせて、敷石の上をガラガラッと馬車を乗りこませた時だ。

僕はいつものように、馬車の中の前のはじめに腰をかけて、金あみ越しにそとを眺めていた。門が開くと監獄の建物の前の、広い前庭の景色が眼にはいった。其の瞬間だ。僕は思わず腰をあげて、金あみに顔を寄せて、建物の直ぐ前に並んでいる檜か青桐かの木を見つめた。そして暫く、と云っても数秒の間だろうが、或る一種の感に打たれてぼんやり腰を浮かしていた。それに気がつく、直ぐに僕は、嘗て帰省の途に汽車の中で打たれた彼のインスピレーションを思い出した。ちっとも違わない、同じ親しみと懐かしさとの、そして一種の崇高の念の加わった、インスピレーションだ。

僕は始めて、これが本当の故郷の感じなのだ、あの時もやはりそうだったのだ、と本当に直覚した。

馬車から降りる。何に一つ親しみと懐しみとの感ぜられないものはない。会う看守毎に、

「やあ、又来たな。」

と云われるのすらも、古い幼な友達か何かの、暖かい挨拶に聞える。そしていよいよ、前にいた例の片輪者の建物に連れて行かれて、お馴染のみんなのこにこした目礼に迎えられて、前にいた隣りの室に落ちついた時には、本当に久しぶりで自分のうちへ帰ったような気がした。

監獄を自分の故郷や家と同じに思うのは、甚だ怪しからぬ事でもあり又甚だ情けない事でもあるが、どうも実際にそう感じたのだから仕方がない。巢鴨は僕が始めて既決囚として入監させられた、従って最も印象の深い生活を送らせられた監獄だ。それに囚人は、他の一切の世界と遮断されて、極めて狭い自然と極めて狭い人間の間、其の情

的生活を満足させなければならないからだ。かてて加えて、囚人の生活は、とにかくに主観に傾きがちの頗る暗示を受け易い、其の一切の印象の極めて深い点に於て、たしかに獄外での普通の生活の十年や二十年に相当する。

此の故郷のことが、自分の幼少年時代の事が、切りに思い出される。殊に刑期の長かった千葉ではそうだった。

僕は出たが、どうせ当分は政治運動や労働運動は許されぬすまいから、せめては文学にかこつけて、平民文学とか社会文学とかの名のつく文芸運動をやってみようかと思った。そして其の手始めに、自分の幼少年時代の自叙伝的小説を書いて見ようかと思った。軍人の家に生れて、軍人の周囲に育って、そして自分も未来の陸軍元帥と云ったような抱負で陸軍の学校にはいった、ちょっと手におえなかった一腕白少年が、其の軍人生活のお蔭で、社会革命の一戦士になる。と云う程のはっきりしたものではなくても、とにかく此の径路を其の少年の生活の中に暗示したい。少なくとも、自分の幼少年時代の一切の腕白が、有らゆる権威に対する叛逆、本当の生の本能的生長のしるしであった事を、書き現わして見たいと。

僕は自分の遠い過去の事を思い出しては此の創作の腹案に耽った。そして其の傍ら、語学の稽古がてらに、原文のトルストイの『幼年時代、少年時代、青年時代』や、ドイツ訳のコロレンコの『悪い仲間』などを見本に読んだ。トルストイのには、其の生活が余りに僕自身のとはかけ離れているので、殆んど何んの興味もひかなかった。『悪い仲間』にはすっかり同感した。其の主人公の父は裁判官であった。裁判官と軍人とに大した違いはない。が僕には不幸にも、裁判官がどんな性質のものであるかを教えてくれる、友達の乞食の父はなかった。其のために僕は、軍人と云うものの本当の性質が分るまでには、随分余計な時間を費した。それが其時の僕にどれ程口惜しかったか。

が、当時の此の創作慾は今に到ってまだ果されない。と云うよりは寧ろ殆んど忘れ果てて、社会評論とも文学評論ともつかない妙な評論書きになって了った。そして今では又、こんな甘い雑録に、漸く口をぬらしている。

監獄人

しかし、今だってまだ、多少の野心のない事はない。現に此の獄中記の如きは、此の雑誌に書く前には、「監獄人」とか「監獄で出来あが

に、陸軍監獄の参観に行つて其のダの実物を見た事もあつた。しかし、それともう一つの、何んでも革具で、ハンドルを廻すとそれがぎゅうぎゅうからだを締めつけると云う、そして二三分もそれを続けるとどんな男でも真蒼になって了うのは、今ではもう殆んど使わないと云う事は、其時にも聞いた。

然るに今、其のダを引きずっているのを、眼の前に見るのだ。其の男は、一列になつた大勢の一番あとに、両足を引きずるようにして、のろのろと云うよりも寧ろ漸く足を運んで行つた。が、其の足の運びかたよりも、更に見るに堪えなかつたのは、其の気味の悪い程蒼ざめた痩せ細つた其の手足とであつた。

どんな悪い事をしてこんな懲罰を食っているのか、又いつからこんな目に遭っているのか、僕は誰れにもそれを聞く機会がなかつた。又誰れにもそれを聞いて見る勇氣がなかつた。よし又、それを知つたところで、それが何んになるとも思つた。

おしゃべりの僕等の仲間も、其の男に会つた時には、皆な黙つてただ顔を見合わせた。いつも僕の隣にいた荒畑は泣き出しそうな顔をして眉をぴりぴりさせた。そして誰れも、其の男の方をちょっと振り向かただけで、幾秒時間の間でも直視しているものはなかつた。

幾度懲罰を食つても

此の懲罰で思い出すが、囚人の中には、どんな懲罰を、幾度食つても獄則を守らないで、とうとう一種の治外法権になっている男がある。何処の監獄でも、いつの時にでも、必ず一人はそう云う男がある。

もう幾度も引合に出した、東京監獄のあの死刑囚の強盗殺人君も、其の一人だ。

巢鴨では例の片輪者の半病監獄にいたのだから、さすがにそう云うのには出遭わなかつたが、それでも裁判所の仮監で同じ巢鴨の囚人だと云うそれらしいのに会つた。

長い間仮監で待たせられている退屈しのぎに、僕は室の中をあちこちとぶらぶら歩いていた。そこへ看守が来て、動かずに腰掛けてぢつとして居れと云う。裁判所の仮監は、あの大きな建物の地下室であつて、床がタタキで其処に一つ二つの腰掛が置いてある。が、長い間木の腰掛に腰掛けているのは、臀が痛くもあり退屈もするので、そんな時には室の中をぶらぶらするが僕の常となつていた。そして其のためは今まで一度も叱られた事はなかつたので、直に僕は其の看守と議論を

小さいとか大きいとか看守等がお互いに話しているのと、其の男に手錠をはめているのだと云う察しだけはついた。

「今時分になって、何んだってあんな事をするんだろう。」

始め僕は、其の男に手錠をはめて、何処かへ連れ出すのかと思った。そんな時か、或はあばれて仕末に終えない時かのほかには、手錠をはめるのをまだ見た事がなかった。其の男は来てからまだ一度もあばれた事もなければ、声一つ出した事もなかった。しかし看守等は、其の男の腕にうまくはまる手錠をはめて了うと、「さあ、よし、これで寝ろ」と云いすてさっさと帰って了った。僕にはどうしても其の意味が分らなかった。

翌朝早く、又二三人の看守が其の男の室に来て、こんどは其の手錠をはづして持って帰った。僕は益々其の意味が分からなくなった。

昼頃になって、雑役が仕事の麻束を持って来た時に、僕は看守のすきを窺って聞いた。

「何んだい、あの向いの奴は？」

「うん、何んでもないのだよ。今まで向うの雑房にいたんだがね、首をつって仕方がないんで、とうとうこっちへ移されちゃったんだ。それで夜ぢゅう、ああして手錠をはめられて、からだが利かないようにされてるんだよ。」

斯うして、夜になると手錠をはめられ、麻になるとそれをはづされて、それが幾日も幾日も、たしか二三ヶ月は続いたかと思う。僕は其の男が何んで自殺しようとしたのか、其の理由は知らなかった。ただ、もう三度も四度も、五度も六度も、首をつりかけたり或は既につけていたりするのを発見された、と云う事だけを聞いた。

そして或晩、其の男が両手を後ろにして帯のところを手錠をはめられているのを見て、どうしてあんな風をして寝られるのだろうと思って、試に僕も手拭で苦心して両手を後ろでくくりつけて寝て見た、始めはからだを横にして寝て見たが、肩や腕が痛くて堪らんので、こんどはうつ伏せになった。しかしそれでは猶苦しいので、又からだを前とは反対に横にした。斯うして一晩ぢゅう転輾して見ようかとも思ったが、どうしても堪えられないで、直ぐに手拭を解いて了った。

それから、これは僕等のとは違う建物にいた男だが、湯へ往復する道で、やはり手錠をはめて、足枷までもはめて、そして重い分銅のようなものを鎖で引きづって歩いているのによく出食わした。

其の男もやはり二十五六の、細面の、どちらかと云えば優男であった。

分銅のような謂わゆるダ（漢字を忘れた）と云う奴を引きずって歩かせる、と云う懲罰のある事は、かねて聞いていた。嘗て幼年学校時代

った人間」とか云うような題で、余程アンビシャスな創作にして見ようかと云う気もあったのだ。

僕は自分が監獄で出来あがった人間だと云う事を明かに自覚している。自負している。

入獄前の僕は、恐らくはまだどうにでも造り直せる、或はまだ碌には出来ていなかった、ふやふやの人間だったのだ。

外国語学校へはいった始めの頃には、大将となって何んとかする事が出来なければ、敵国に使して何んとかすると云うような支那の言葉に囚われて、或は外交官になって見ようかと云う多少の志がないでもなかった。又、学校を出る当座には、陸軍大学の教官となって、幼年学校時代の同窓等に、しかも其の秀才等に「教官殿」と呼ばして鼻を明かしてやろうかと云うような、子供らしい考がないでもなかった。学校を出てからも、僕の旧師であり且つ陸軍でのフランス語のオーソリティであった某陸軍教授を訪ねて、陸軍大学への就職を頼んだ事もあった。其の話が余程進行している間に、しかも其の教授の運動の結果を聞きに行く筈の日の数日前に、電車事件で投獄された。そして此の投獄と共に其の後の運命はきまって了った。

そればかりではない。僕の今日の教養、知識、思想性格は、総て皆な、其後の入獄中に養いあげられ、鍛えあげられたと云ってもよい。二十二の春から二十七の暮れまでの獄中生活だ。しかし、前に云ったように、極めて暗示を受け易い心理状態に置かれる獄中生活だ。それがどうして、僕の人間に、骨髓にまでも食い入らないでいよう。

故郷の感じを始めて監獄で本当に知ったように、僕の知情意は此の獄中生活の間に始めて本当に発達した。いろいろな人情の味、と云うような事も始めて分った。自分とは違う人間に対する、理解とか同情とか云うような事も始めて分った。客観は愈々益々深く、主観も亦愈々益々強まった。そして一切の出来事をただ観照的にのみ見て、それに対する自己を実行の上に現わす事の出来ない囚人生活によって、此の無為（イナクティブ）を突き破ろうとする意志の潜勢力を養った。

僕は又、此の続獄中記を、「死処」と云うような題で、僕が獄中生活の間に得た死生問題に就いての、僕の哲学を書いて見ようかとも思った。現に、一と晩夜あけ近くまでかかって、其の発端だけを書いた。

東京監獄で押丁（おうてい）を勤めていて、僕等被告人の食事の世話をしていた、死刑執行人に就ての印象。友人等の死刑後の、其の首に残った、紫色の広い帯のあとに就いての印象。千葉監獄在監中の、父の死に就いての印象。一親友の死についての印象。又、牢獄の梁の上からぼたりぼたりと落ちて来る蠅の自然死に就いての印象。一同志の獄死に就いての印象。一同志の出獄後の狂死に就いての印象。其他数え立

てれば殆んど限りのない、いろいろな深い印象、と云うよりは寧ろ印象が、死と云う問題に就いての僕の哲学を造りあげた。

実際僕は、最後に千葉監獄を出た時、始めて自分が少々真人間らしくなった事を感じた。世間の何処に出ても、唯一者としての僕を、遠慮なく發揮する事が出来るようになった事を感じた。そして僕は、僕の牢獄生活に対して、神の与えた試練、み恵み、と云うような一種の宗教的な敬虔な感念を抱いた。

牢獄生活は広い世間的生活の縮図だ。しかも其の要所要所を強調した縮図だ。そして此の強調に対するのに、等しく又強調された心理状態を以て向うのだ。これ程いい人間製作法が他にあらうか。

世間の生活は広い。いくらでも逃げ場所はある。従って其処に住む人間の心はとかくに弛緩し易い。本当に血の滴るような深刻な内面生活は容易に続け得られない。其他種々なる俗的関係の顧慮もある。一切を忘れる種々なる享樂もある。なまけ者には到底其の人間は造れない。そして人間は元来がなまけ者に出来ているのだ。

僕は最後に出獄して、先づ世間を見て、其の人間共の頭ばかり大きく發達しているのに驚かされた。頭ばかり大きく發達しているのはなまけ者の特徴だ。彼等はどんなに深刻な事でも考えると云う。しかし其の考や言葉には、其の表に見える深刻さが、其儘裏づけられている、と云うようなのは殆んどない。裏づけられた実感の方が、其の現わされた考や言葉よりも更に一層深い、と云うようなのは滅多にない。其の考や言葉が其儘直ちに実行となって現われなければ已まない、と云うようなのは更に少ない。

僕は此のなまけ者共の上の特権者だ。監獄人だ。

が、こんな事を一々事実を照らして具体的に暗示し説明して行くことは、此の雑誌の編輯者の希望ではない。せいぜい甘い、面白可笑しいものと云う注文なんだ。

つい脱線して飛んだ気焔になって了ったが、ちょっと籐椅子の上に乗って寝ころんで、日向ぼっこをしながら一ぶくして、又始めの呑気至極な思い出すままだらりだらりと書いて行く与太的雑録に帰ろう。

死刑執行人

と云ってもやはり、先づ思い出すのは、先きに書きかけた「死処」の中の材料だ。これはいづれ物にするつもりであるが、従って今洩ら

子供の時には、誰でもやるように、トンボや、蟬や、蛙や、蛇や、猫や犬をよく殺した。猫狩りや犬狩りをすらすらやった。そしてほかの子供等が或は眼をそむけ、或は逃げ出してう程の残忍を敢てして、得々としていた。虫や獣が可愛いとか、可哀想だなぞと思う事は殆んどなかった。ただ獣で可愛いのは馬だけだった。父の馬は、よく僕を乗せて、広い練兵場を縦横むじんに駈け廻ってくれた。が、小動物は総て皆な、見つけ次第になぶり殺すもの位に考えていた。

それが今、獄中でも此のトンボの場合に、ただそれを自分のそばに飼って見ようと云う事にすら、それ程のショックを感じたのだ。動物に対する虐待とか残忍とか云う事は、大きくなってからは、理性の上には勿論感情の上にも多大のショックを感じた。しかし殊に自分がそれをやっている際に、こんなに強く、こんなに激しく、こんなに深く感じた事はまだ一度もなかった。そして其時に僕は、僕のからだの中に、或る新しい血が滔々として溢れ流れるのを感じた。

其後僕は、いつも此の事を思い出すたびに、僕は其時のセンチメンタリズムを笑う。しかし又翻って思う。僕のセンチメンタリズムこそは本当の人間の心ではあるまいか。そして僕は、此の本当の人間の心を、囚われ人であったばかりに、自分のからだの中に本当に見る事が出来たのではあるまいか。

手枷足枷

やはり此の千葉での事だ。

或日の夕方、三四人の看守が何にかガチャガチャ云わせながら靴音高くやって来るので、何事かと思ってそっと例の「のぞき穴」から見ていると、てんでに幾つもの手錠を持って、僕の向いの室の戸を開けた。其の室には、其日の朝、しばらく明いていたあとへ新しい男がはいったのであった。

「いいから立て！」

真先にはいった看守が、お辞儀をしている其の男に、大きな声であびせかけた。其の男はおづおづしながら立ちあがった。まだ二十五六の、色の白い極く無邪気らしい男だった。

「両手を前へ出せ！」

再び其の看守は唳鳴るように叫んだ。そして其の中にほかの看守等もどやどやと靴ばきのまま室の中にはいった。何をしているのかは見えない。ただ手錠をしきりにガチャガチャ云わしていると、これじゃ

の声。春秋お祭時の笛や太鼓の音。時とすると冬の夜の「鍋焼きうどん」の呼び声。殊には又、生命のあるもの少しでも自分の生命と交感する何物かを持っているものは、堪らなく懐かしい。空に舞う鳶、夕暮近く飛んで行く鳥。窓のそとで呟く雀。

然るに今、其の生物の一つが、室の中に飛びこんで来たのだ。僕は直ぐに窓を閉めた。そして箒ではらったり、雑巾を投(ほう)ったりして、室ぢゅうを散々に追ひ廻した末に、漸くそれを捕えた。

僕は此のトンボを飼って置くつもりだった。馴れるものか馴れないものか、僕はそれを問題にする程、トンボに智恵があるかとは思っていなかった。が、出来るものなら、何にか食わせて、少しでも此の虫に親しんで見たいと思った。

僕はトンボの羽根を本の間に挟んでおさえて置いて、自分の手元にある一番丈夫そうな片(きれ)の、帯の糸を抜き始めた。其の糸きれを長く結んで、トンボをゆわえて置くひもを作ろうと思ったのだ。

が、そうして、厚い洋書の中に其の羽根を挟まれて、切りにもみ手をするように手足をもがいているトンボに、折々目をくばりながら、もう大ぶ糸も抜いたと思う頃に、ふと、電気にでも打たれたかのようにぞっと身慄いがして来た。そして僕はふと立ちあがりながら、其のトンボの羽根を持って、急いで窓の下へ行って、それをそとに放してやった。

僕は再び自分の席に帰ってからも、暫くの間は、自分が今何をしたのか分らなかった。其時の電気にでも打たれたような感じが何んであったか、と云う事にすらも思い及ばなかった。僕はただ、急に沈みこんで、ぼんやりと何にか考えているようだった。そして其のぼんやりとしていたのがだんだんはっきりして来るにつれて、何んでも糸を抜いている間に、「俺は捕えられているんだ」と云う考がほんのちょっとした閃きのように自分の頭を通過した事を思い出した。それで何にもかもすっかり分った。此の閃きが僕にある電気を与えて、僕のからだを窓の下まで動かして、あのトンボを放してやらしたのだ。

僕は、今世間で僕を想像しているように、今でもまだ極く殺伐な人間であるかも知れない。少なくともまだ、僕のからだの中には、殺伐な野蠻人の血が多量に流れている。折りを見ては、それがからだの何処かから、ほど走り出ようともしよう。僕は決してそれを否みはしない。殺伐な遊戯、殺伐な悪戯、殺伐な武術。其他一切の殺伐な事にかけは、子供の時から何によりも好きで、何人にも負を取らなかった僕は、そしてそれで鍛えあげて来た僕は、今でもまだ其の気が多分に残っていないとは決して云わない。

すのは大ぶ惜しい気もするが、其の中のたった一つだけを見本のつもりで書いて置こう。

東京監獄に、今はもういないが、もと押丁と云うのがいた。看守の下廻りのようなもので、被告人等に食事を持ち運んだりする役を勤めていた。いつも二人か三人かはいたようだが、皆んなまだ若い男で、一二年勤めているうちには、小倉のぼろ服を脱いでサアベルをつった看守になった。

が、其の中にただ一人、十年か二十年か或はもっと長い間か、とにかく最後まで、押丁で勤め終わせた一老人があった。僕が始めて見た時には、もう六十を二つ三つは越した年齢であったろうが、小造りながら厳丈な骨組の、見るからに気味の悪い形相の男だった、実際僕は始めて東京監獄にはいった翌朝、例の食器口のところへぬくと此の男に顔を出された時には、思わずぞっとした。栄養不良らしい蒼ざめた鈍い土色の顔を白毛まじりの灰色の濃い髭にうづめて、其の中から余り大きくもない眼をぎょろぎょろと光らしていた。其の光りの中には、強盗殺人犯か強盗強姦犯かの眼に見る獐猛な光りと、高利貸かやりて婆さんかの眼に見る意地の悪い執拗な光りとを併せていた。それに其の声までが、少ししゃがれ気味の低い、しかし太い、底力の籠った、何処までも強請して来る声だった。ちょっと何にか云うのでも、けだ物の吠えるように聞えた。

「これに拇印をおして出せ。」

不意に斯う怒鳴られるように呼ばれて、差入弁当と其の差入願書とを突き出されたものの、其の突き出して来た太い皺くちな土色の指を気味悪く見つめたまま、暫く僕はぼんやりしていた。

「早くしろ。」

僕は再び其の声に驚かされて、あわてて拇印をおして、願書をさし出しながらそうと其の男の顔をのぞいた。そして不意に、本能的に、顔をひっこめた。何んと云う恐ろしい、気味の悪い、いやな顔だろう。

初めての差入弁当だ。麴町の警察と警視庁とに一晩づつを明かして、二日半の間、一粒の飯も一滴の湯も咽喉を通さなかった今、始めて人間の食物らしい弁当にありついたので。それなのに、どうしても僕は、直ぐに箸をとる気になれなかった。今の男の声と指とが眼の前にちらつく。殊に、あの指で、と思うと、漸く箸を持ち出してからも、はき気をすらも催した。

被告人等は皆な、他の押丁とは、よくふざけ合っていた。おつけの盛りかたが少ないとか、実の入れかたが少ないとか、云うような我がままでも云っていた。どうかすると「なんだ押丁のくせに」と食ってかかるものすらもあった。又、其の押丁が看守になってからでも、皆ん

なはやはり、前と同じように親しみ狎れ、又は軽蔑していた。或る押丁あがりの看守の如きは、其の男は今でも看守をしているが、其の姓が女郎の源氏名めいているところから、夜巡回に来て二階の梯子段をかたかた昇って行く時なぞに、「○○さんへ」と終りの方を長くのばした黄いな声で呼ばれて、からかわれていた。

しかし彼の老押丁とは誰れ一人口をきくものもなかった、先きに云った僕との獄友の強盗殺人君ですらも、此の老押丁とは多くはただ睨み合ったまま黙っていた。看守も、他の押丁に対しては時々大きな声で叱ったりする事もあるが、此の老押丁に対してだけは余程憚っていた。用事以外には口もきかなかった。

老押丁は斯うして皆んなに憚られ気味悪がられ恐れられながら、いつも傲然として、黙々として自分の定められた仕事をしていた。そして自分のする仕事に就いて少しでも口を出すものがあれば、被告人でも上役のものでも誰れ彼れの別なく、直ぐに眼をむいて怒鳴りつけた。僕は此の男が一度でも笑い顔をしたのを見た事がなかった。

やがて僕は、此の男に、だんだん興味を持ち出して来た。気味の悪いのや、折々怒鳴りつけられて癪にさわるのは、始めからと変りはなかったが、それだけ此の男に就いての印象は益々深く、其の人間を知ろうとする興味も益々強まって行った。

或日の運動の時、僕は獄中の何事に就いてでも其の男に尋ねるのを常としていた、そして又何事に就いてでもいつも明快な答を与えてくれた例の強盗殺人君に此の老押丁の事を話しかけた。

「あの爺の押丁ね、あいつは一体何者なんだい。」

なんでも其の日の朝、食事の時に、おつけの味の盛りがたが少なくと云うような小言を云って、強盗殺人君は老押丁に怒鳴られていた。僕はそれを思い出して、何気なく聞いて見たのだった。そして僕は、せいぜい、

「うん、あいつか。あれはもと看守部長だったのが、典獄と喧嘩して看守に落されて、其後とうとう押丁に落されちゃったんだ。」

位の返事を期待していたに過ぎなかった。が僕は、僕の間の終るか終らぬうちに、急に強盗殺人君の顔色の曇ったのを見た、そして其の答の意外なのに驚かされた。

「あいつがこれをやるんだよ。」

殺人君は親指と人さし指との間をひろげて、それを自分の咽喉に当てて見せた。僕は其儘黙って了った。殺人君もそれ以上には何んにも云わなかった。

それ以来僕は、先きに気味悪かった此の老押丁の太い皺くちな土色の指を、食事を突き出される度に、益々気味悪く見つめた。時としては、思わずそれから、眼をそむけた。

其後幸徳等が殺された時に聞いた話だが、死刑執行人は執行のたびに一円づつ貰うのだそうだ。そしてあの老押丁はそれを皆んな其の晩に飲んで了うのだったそうだ。彼れは、幸徳等十数名が殺された直ぐあとで、何故か職を辞した、と聞いた。

今僕は、ここまで書いて来て、暫く忘れていた、「あの指」を思い出して、又友人等の死骸に見た咽喉のまわりの広い紫色の帯のあとを思い出して、其の当時の戦慄を新しくしている。

嘗つて僕はユウゴオの『死刑五分間』を読んだ。又アンドレイエフの『七死刑囚』を読んだ。殊に後者は、余程後に、千葉の獄中で読んだ。其の時にはたしかに或る戦慄を感じた。しかし今、其の筋を思い出して見ても、嘗つての時の戦慄の実感は少しも浮んで来ない。其の凄惨な光景や心理描写が、極めて巧妙に極めて力強く、描き出されてあった事の記憶が思い浮べられるに過ぎない。けれどもあの二つの事実だけは、思い出すと同時に直ぐに其の当時の実感が湧いて来る。周囲の光景や場面の、又其の時の自分の心持の記憶なぞよりも先きに、先づぶるぶると慄えて来る。

「俺は捕えられているんだ」

千葉での或日であった。運動場から帰って、暫く休んでいると、突然一疋のトンボが窓からはいって来た。

木の葉が一つ落ちて来ても、花びらが一つ飛んで来ても、直ぐにそれを拾っているんな連想に耽りながら、暫くはそれをおもちゃにしているのだった。春なぞにはよく、桜の花びらが、何処からとも知れず飛んで来た。窓から見えるあたりには桜の木は一本もなかった。窓に沿って並んでいる幾本かの青桐の若木と、堺が「雀の木」と呼んでいた何時も無数の雀が群がっては囀っている何にかの木が一本向うに見えるほかには、草一本生えていなかった。されば、あの高い赤い煉瓦の塀のそとの、何処からか飛んで来たとしか思えない此の一片の桜の花は、たださえ感傷的になっている囚人の心に、どれ程のうるおいを注ぎこんだか知れない。

何んでも懐かしい。殊に世間のものは懐かしい。多分看守の官舎のだろうと思われる子供の泣声。小学校の生徒の道を歩きながらの合唱